博士（人間科学）学位論文 概要書

Immediate Effects of Counselor Interventions on Client Verbal and Covert Behaviors

カウンセラーの介入がクライエントの言語および内面行動に及ぼす即時的効果

２００７年 7月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

李　翰宗

Lee, Hanjong

研究指導教員：野村　忍　教授

カウンセリングの過程研究とは「カウンセリング中に何が起きているか」を記述する研究であり，セッション中にカウンセラーとクライエントが発する外面行動(overt behavior)および内面行動(covert behavior)を観察・分析する．外面行動は，両者が発する観察可能な言語行動を通し，内面行動は，両者が経験する認知・感情を通し，測定することができる．

過程研究とは対照的に，成果研究は「カウンセリングは有効であるか」という問題を検証する．成果研究を行う時には，一般的に，処置群と統制群を設け，カウンセリングの全過程が終了した後，両群の問題改善の程度に統計的に有意な差が存在するか否かを調べる．

ここで考えるべきことは，カウンセリングがクライエントの問題解決に有効であることが検証できても，カウンセラーとクライエントの間で何が起き，それがどう作用し有効性につながったのかが説明できないと，何の有効性を検討したのかが曖昧になるということである．Greenberg (1986)の薬物実験の比喩を借用すると，薬物の中身を分からないまま，青と緑の丸薬を患者に与え，両丸薬の効果を比較するのと同じことになるわけである．過程研究は青と緑の丸薬の中身を調べる研究である．カウンセリングの治療のメカニズムを究明するためには，過程研究を行わなければならない．そこで，本論文では，面接過程を観察し，カウンセラーの介入が，介入直後にクライエントの言語行動および内面行動に及ぼす影響を検討することを目的とする．

研究1から３までは，本論文で取り上げる変数を測定するための尺度の作成を行った．研究４と５では，二段階の分析計画を立て，カウンセラーの介入とクライエントの行動との関係を検討した．まず，第一段階では，カウンセリングセッションの有効性に肯定的もしくは否定的な影響を及ぼし得るクライエントの行動の確認を試みた．第二段階では，第一段階で確認できたクライエントの行動が，カウンセラーのどのような介入により引き起こされやすいのかを検討した．

まず，研究１では，カウンセリングの有効性をカウンセリングの全過程という大きい単位で測定してきた既存の観点に代わり，個々のセッションの有効性を測定するために，有益な経験尺度(Helpful Experience Scale: HES)を作成し，その信頼性と妥当性を検討した．

研究２では，カウンセラーの介入を分類するために，Hill & O’Brien (1999) の分類システムに一部修正を加え，Helping Skills System-Modified (HSS-M) を作成した．その後，HSS-Mを用い，来談者中心療法および論理情動行動療法の著名なカウンセラーが行った面接の逐語録を分析し，HSS-Mの信頼性と妥当性の検討を行った．

研究３では，クライエントの言語行動を分類するために，Hill Client Verbal Response Modes Category Systems (Hill, 1986) およびClient Behavior System (Hill et al., 1992) からカテゴリーを選び，Client Response Modes System (CRMS) を作成した．その後，大学生同士の会話と著名なカウンセラーの面接の逐語録を分析しCRMSの信頼性と妥当性を検討した．

研究４では，大学生を対象に模擬カウンセリングを行い，カウンセラーの介入がクライエントの言語行動に及ぼす影響を検討した．前述した二段階の分析計画に従い，まずクライエントの言語行動の発生比率とHES得点との関係を調べた．これにより，セッションの有効性に肯定的もしくは否定的な影響を及ぼし得るクライエントの言語行動が確認された．その後，カウンセラーの介入がこれらのクライエントの言語行動の発生確率に及ぼす影響を検討した．その結果，クライエントの自己探索を促進する介入と妨げる介入の存在が示唆された．

研究５では，研究４で行われた模擬カウンセリングから得られたクライエントの自由記述を基に，クライエントが有益であると評価した介入と有益でないと評価した介入に対する内面反応の内容の詳細を調べ，Positive and Negative Effects Taxonomy(PNET)を作成した．その後，カウンセラーの介入とPNETの各々のカテゴリーの連係のパターンを検討した．その結果，カウンセラーの介入がクライエントの内面行動に及ぼし得る肯定的・否定的影響の内容が示された．

本論文では，カウンセラーの介入がクライエントの言語行動および内面行動に及ぼし得るさまざまな影響の内容が示された．しかし，これらは模擬カウンセリングから得られた結果であるため，実際の臨床場面でも同一の結果を得られるか否かは今後の研究で検討すべき課題であると思われる．